



【図2】1973年の塩屋海岸（国土地理院発行）



【図3】2002年の塩屋海岸（国土地理院発行）

【図1】
伊予郡松前町
塩屋海岸



経年変化や海浜植物群落の分布調査、繁殖

岸です。しかし、環境省の脆弱沿岸海域図の説明では、塩屋海岸は「オカヒジキやコウボウムギ、ハマニガナは、緊急に対策が必要」と記載されています。そこで海浜面積の

「気象と海象の両方の影響を受け、厳しい環境にある海辺の植物が次々と姿を消していく現状を知り、農業土木と生物工学の技術で生態系を保全したい。」そんな願いからこの活動は生まれました。

消えた海辺の植物を取り戻そう

特集
6



愛媛県立
伊予農業高等学校
伊予農希少植物群
保全プロジェクトチーム
サブリーダー
環境開発科3年
杉本 勇斗



法の研究、環境整備や啓発活動を行うプロジェクトが2004年に発足し、以来私たちは、先輩の思いを引き継ぎ、関連機関と連携して、塩屋海岸から消えた海浜植物や絶滅が危惧される種を保全し、復元するプロジェクトに取り組んでいます。

1973年撮影の空中写真(図2)をみると塩屋海岸は2kmにも及んでいますが、現在(図3)では、重信川右岸と国近川左岸は埋め立てられ、海岸線は900mになりました。また、先人や私たちの調査から、ナミキソウやオニシバ、ネコノシタやピロードテンツ

キ、ケカモノハシ、さらに近年、ハマニガナを含む六つの種(表1)が姿を消し、帰化植物や内陸性植物が進入していることがわかりました。また、これらの植物の復元に当たっては、愛媛県県民環境部環境局自然保護課から御指導をいただき、特に

①対象種の減少原因を調査し、原因を取り除いた上で再導入したことが、

②他の野生動物の生息・生育に与える影響を予測・検討したことが、

③感染病原体・寄生虫を持つていないか検討したこと、

④他から再導入する場合は、地域個体群の遺伝子攪乱に注意した

こと、

⑤そして何より地域住民の理解を得ながら、その効果を随時公表するようにしています。

まず、移植する植物が生育できる最適な場所を探すために、土の温度、電気伝導度を測り、潮流による漂砂などから、国近川付近に安定帯(図4)が存在し、消えた六種がこの場所なら生存し続ける可能性が高いことがわかりました。次に私たちは、周辺海岸で、日本自然保護協会や愛媛植物研究

海浜植物名	伝承・古い伝え	1965年調査	1974年調査	1978年調査	2005年調査
ナミキソウ	○	×	×	×	×
オニシバ	○	○	○	○	×
ネコノシタ	○	○	○	○	×
ピロードテンツキ	○	○	○	×	×
ケカモノハシ	○	○	○	○	×
ハマニガナ	○	○	○	○	×
ハマウド	○	○	○	○	○
ハマエンドウ	○	○	○	○	○
ハマゴウ	○	○	○	○	○
ツルナ	○	○	○	○	○
ハマヒルガオ	○	○	○	○	○
ハマボウフウ	○	○	○	○	○
コウボウムギ	○	○	○	○	○
オカヒジキ	○	○	○	○	○

【表1】
塩屋海岸の海浜植物群落の経年変化

特集

自分たちの地域を大切に 高校生パワー全開!



【図5】 植栽し開花したハマニガナ



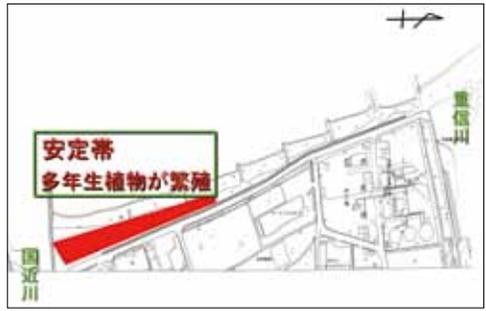
【図6】 植栽し開花したナミキソウ

毎月第二土曜日に海岸清掃(図8)を9年間続けています。そして清掃終了後には、その日に回収したゴミを可燃物、不燃物、プラスチック、ビン、缶、ペットボトル、漂着物、流木に分けて重さを計測しています。毎回、ゴミ袋が90〜100袋、重さにして約500kg集まり、まだまだ、海岸利用者の環境に対する意識



【図10】 河口に設置しているWebカメラ

【図4】 多年生植物の植栽場所



許可を得て採取し、塩屋海岸の安定帯に植栽(図5)しました。また、ナミキソウは香川の水辺を考えると、会より譲り受け、挿し木による増殖で植栽(図6)しました。

ところが、冬期に飛砂が発生し、植栽したハマニガナは、砂に埋まってしまいました。よく観察すると、多年生の植物がある場所は周囲より高くなっており、これは飛砂で植物が上へ上へと伸びるため(図7)



【図7】 多年生植物の場所の砂の高まり

で、植生がある場所の飛砂量が少ないことをあわせて考えれば、海浜植物が身を盾にして道路への飛砂を防いでおり、改めて海浜植物群落の重要性を知りました。

ところで砂浜は、シードバンクとして発芽する種子を蓄えています。ゴミの不法投棄など、砂浜があまりにも軽率に扱われていることに驚きました。そこで、環境整備を進めるため、愛媛県土木部や松前町まちづくり課と連携し、「愛媛ふれあいの海辺」の認定を受け、さらに各種団体と協力しながら、地元新聞に参加を呼びかけるボランティア情報を発信し、

前町まちづくり課と連携し、「愛媛ふれあいの海辺」の認定を受け、さらに各種団体と協力しながら、地元新聞に参加を呼びかけるボランティア情報を発信し、



【図9】 愛媛県産の間伐材で作った大型啓発看板



【図8】 海岸清掃

の薄さが気になります。特に夏になると、花火やパーベキュウの不始末が目につきます。

そこで、塩屋海岸ほぼ中央部に、愛媛県産の間伐材で作った大型啓発看板(図9)を設置して、現在ある海辺の植物や一度は消えた6種の植物を掲示しています。さらに、重信川河口にWebカメラを設置(図10)し、学校のホームページにリンクさせ、LIVE画像を配信していますので、一度「伊予農業」で検索してみてください。今後も、産業界・学校・行政・ボランティア団体・メディアと連携しながら、海辺の植物の保全活動を里浜づくりの一つとして続けていきたいと思えます。